

石川の巨樹「子持ちカツラ」の魅力

眼前には見上げるばかりの威容のカツラ巨樹があった。場所は白山市白峰、正に「知る人ぞ知る」と云われる愛称「子持ちカツラ」（白山市指定天然記念物）との初対面、感激の出会いであった。その出会いは2020年の秋、市ノ瀬駐車場から山道を歩く事2時間、やっと実現したのである。



「子持ちカツラ」と筆者

小生の巨樹への憧れ、巨樹愛は1970年代、「縄文杉」を訪ねた学生時代（名古屋）に始まる。東京に住んでいた1980年代には『巨樹の顔』の写真集（文・牧野和彦、写真・八木下弘）を買い込み、日本における巨樹を机上で楽しんでいた。そこに紹介されていた石川県代表の巨樹には、「太田のオオトチ」と「御佛供スギ」があった。「子持ちカツラ」はその頃は限られた人達にし

知られていなかったようだ。（白山系にはまだまだ未知の巨樹があるかもしれない）

ところで自己紹介だが、小生の本職はウイルス研究であり、40年以上にわたってウイルスの遺伝子、タンパク質等について解析をしてきた者である。それが何で巨樹を？と思われるかもしれないが、地球上で最小の生命体のウイルスと最大の生命体の巨樹、そのどちらも「生きていて」という点で共通している。遺伝子の面から見ればどちらも共通の原理から成り立っており、また大小の生命体には相互の遺伝子移動（現象）があり、生命進化の点から見ても、興味深い。

例えば樹木に付いている大きなこぶ状のものがあるが、そこにウイルスが関係していることが推定される。ある程度分かってきた事は、「Tiプラスミド」が樹木の細胞に入り込み遺伝子発現を変更させ、異常な細胞壁を作り出し、いわば腫瘍のようなもの（クラウンゴール）ができる。無粋な話はさて置き、巨樹には大いなる魅力がある事を強調したい。自分の事を言えば、巨樹・古木を見るとそれだけで気持ちワクワクするのだ。そうした感覚がどこから来るのか分からないが、同じ「生きても」として人を含めての動物と植物相互に相通するものがあるのではないだろうか。巨樹には数千年という想像しがたい長い年月を生き続けるものがいる、それは意識する、しないに関わらず、動物と植物の間に共通する生命体としての正に畏敬の念が生ずる、というのではないか。数億年という長い生命の進化の過程において動物界と植物界とは、持ちつ持たれつの共生関係にある事は自明であろう。

「県巨樹の会」の巨樹探訪会には5年ほど前から参加しているが、巨樹の魅力と言えば大きさ、樹形、樹齢といった要素の他に、そこにたどり着くにはかなり険しい道を行かねばならない「秘境の巨樹」なんてのも良いと思う。「子持ちカツラ」はそれにあたり、魅力度最大である。それは言うものの、近頃では足も弱くなってきた小生にとって、身近の巨樹「も良いと思うようになってき

た。白山登山30回とか言って威張っていたのは今は昔、簡単に行ける道があればそちらを取る。何と云ってもあそこがれの巨樹である。出会いが大切だ。

ここ十年ほど一人楽しんでいる場所は、県林業試験場樹木公園（白山市三宮町）。色々な樹木があり、興味深い場所が多い。駐車場脇にあるカツラの並木は目立たないが、すごく良い。カツラは季節ごとに葉の色合いを緑から黄色へと変え、樹木の美形を存分に見せていて、感心させられる。

巨樹愛は、こうした人の手による街路樹にも目がいく。緑多き環境は人に優しい。最近、国連提唱のSDGs（持続可能な開発目標）に取り上げられている点を含め、未来の世界にあっても巨樹に代表される樹木の影響は大きなものと言える。巨樹の栄える環境には、人を呼ぶ（観光）事につながる要素もあるだろう。

その「つながり」については言えば、2020年には新型コロナウイルス感染症が大流行し、急にウイルスに焦点が当てられてきて、小生もウイルスの話に依頼される機会が増え、そこで更に多くの方々を知り合う事になった。本誌『石川の林業』に載せていただくこともそうであるが、「出会い」と「つながり」が更に拡大していくことは嬉しいものである。

（県巨樹の会 竹上 勉）



新緑のカツラ並木(本年5月撮影)